

大会報告

第66回日本歯科医療管理学会総会・学術大会を終えて

会期：令和7年7月19日（土）～20日（日）

場所：中小企業振興会館

第66回日本歯科医療管理学会総会・学術大会

大会長 比嘉良喬

13年ぶりの二度目の大会長を仰せつかったの大会報告

参加者200名余、9:00から九州歯科医療管理学会総会からスタート、開会式にはすでに100名を超す参加者、理事長も今までの開会式に比べ多くの参加者にびっくり、10:20からタイトな日程で、口演6題を皮切りにスタート、基調講演「今後の地域医療構想について」を厚生労働省医政局医事課長の中田勝己先生から講演いただき、大会テーマである「2040年 未来に向けての羅針盤」への幕開けとなりました。

ランチョンセミナーにおいては「口は内科の入り口である一医科と並ぶ“もう一つの臓器科”としての歯科へ」をバイオガイアジャパン株式会社会長の野村慶太郎先生から今までと違った切り口で講演をしていただきました。

ポスター発表22題を挟んで、今回の大会テーマ「2040年 未来に向けての羅針盤」を位置付けた、「2040年 未来に向けての交差する3本の軸」と題しシンポジウムとして3人の講師に講演をしていただきました。

「地域の中での歯科の医療連携の形」を医療法人社団湧泉会の岡本佳明先生に、「ICT時代の歯科診療所」を医療法人社団ビクトリア会の小野清一郎先生に、そして「これからの歯科医師教育の問題点と課題—先生方の出番となるかも?—」を日本歯科大学学長の藤井一維先生に講演していただきました。その後3名の講師を交えて、参加者とのディスカッションを行い、会場は熱気溢れた雰囲気でした。

シンポジウムの後の1日目最後の口演6題においても、会場は満席状態で終わることができました。その後、沖縄流のおもてなしの懇親会へと足を運んでいただきました。

懇親会は那覇セントラルホテルで開催し、参加者は100名を超え会場は講演会場同様に満席となりました。

幕開けは、琉球国祭り太鼓によるエイサー、ミルクム

ナリからスタート、アップテンポの年中口説と最後は未来に向けてのダイナミック琉球と太鼓の響きで会場の熱気は最高潮に達し、講師への謝意として、大会名と講師名をボトルに彫り込んだ特別な泡盛を記念品としました。2040年に今回の大会を検証できるよう古酒になったボトルを開封してもらいたいとの思いを詰めました。参加者も最後まで途切れることなく、次回開催県の大金誠大会長、守屋義雄名誉大会長からの挨拶をいただき、閉幕となりました。

2日目、皆さん観光地沖縄ですので三々五々観光地や海へ繰り出すかと思いきや、会場は前日同様の満席状態で、朝一の特別講演「これからの見すえた高齢者への歯科的対応」を九州歯科大学歯学部史学科摂食嚥下リハビリテーション学分野の藤井航先生に講演いただき、その後口演6題を終え、教育講演（認定研修会指定講演）「絶対的歯科医療行為と相対的歯科医行為」を東京科学大学ヘルスケア教育機構の鶴田潤先生に講演いただきました。

最後の特別講演として「歯科におけるこれからの“患者-医療者関係”を考える」を九州歯科大学特任教授の木尾哲朗先生に講演いただき、最後までほぼ満席状態で大会を終えることができました。

全体として、タイトな時間設定にもかかわらず多くの参加者が会場にとどまり講演に耳を傾けていただけたことは、主催者としても最高の大会でした。特に今大会は、九州歯科医療管理学会として依頼を受け、沖縄県で開催するという今までにない大会運営でした。人手も足りないなか、郵便料金の値上げや郵送物の折り込みなどはWebで行えるものを最大限に使い、経費削減を図りました。また、運営しやすいワンフロアの会場探し、講演会場・展示ブース・ポスター会場の導線やレイアウトなども演題申し込み数を考慮して順次変更しました。

九州地区の役員とは、メーリングリストやLINEを使って連絡を取り合い、当日運営における各部署の役割

分担も、ぶっつけ本番状態でしたが、運営委員の皆様の臨機応変の対応には感謝の一言です。また、受付や講演会場の運営に携わっていただいた（一社）沖縄県歯科衛生士会の協力および支援体制には随分助けられました。

参加者は、北海道から九州まで全国から集まっていたが、県内からの参加は運営に携わった3名を含めて5名、残りはすべて県外からの参加者と、驚きです。

令和5年の第64回日本歯科医療管理学会総会・学術大会で打診を受け、令和6年の第65回大会で開催を決定。8～12月までに骨格を作り、並行してホームページやポスター作成、会場および印刷物の手配、予算書作成、学会の骨格となる講師への依頼文書など事務処理に追われ

つつ、令和7年1月から本格的に口演・ポスター発表の告知をしながら、事前申し込みを開始しました。大会メールアドレスを酷使しながら、抄録の校正などを編集事務局と連携を取りながら行い、学会誌と当日配布のプログラムといった印刷物を仕上げました。事前受付の対応や参加証・プログラムの配布、当日受付など多少のトラブルはありましたが、無事に終了することができました。

18日の役員会、各種委員会、社員総会から19～20日午前中までの3日間、怒涛のような日々を送りました。多分もうこのような機会はございませんが、充実した日々を送れたことに、感謝申し上げます。



大会終了後の全体集合写真、皆さんの笑顔が大会成功の証です